

## 適応感についての一研究

—自己意識との関連において—

広 瀬 美弥子

### 問題と目的

ある個人の適応状態を理解しようとするとき、外側からその人をながめていたのでは、どうしても捉えきれぬ何者かを感じることもある。それは、「その個人にとっての適応」の意味であり、もっとわかりやすく言うならば、自分は適応していると感じているか否かというその人自身の意識である。

1950年頃から、行動の frame of reference としての自己意識についての理論が、Rogers らによって確立され始め、以来、自己意識こそ個人の適応の指標となり得るものだという考えにもとづき、数々の実証的研究が相次いでいる。

しかし従来の諸研究を概観すると、そこでは実に様々な測定尺度が用いられていることに気づく。このことと関連して、自己意識を把握する際には、各測定尺度の独自性を無視することによって結果的に数量的処理が先行し、内容的な吟味はなおざりにされているという問題性を提起したい。さらに、そうして測定された自己意識をそれとは別個の適応の指標 (external criteria) と照合する段階にとどまっているということもまた、ひとつの問題点と言えよう。

そこで本研究では、あくまでも自己の意識の一部として個人の内的枠組を通して見た適応、すなわち「適応感」を捉え、その意味を検討することを目的とする。

具体的には、① Self — Differential scale を作成しこれを用いて「自己像」という形で適応感を把握し、② その意味づけのために、Purpose — in — life test (P I L) により測定される「生きがい感」との関連を見、③ さらにロールシャッハ・テストから把握される「自己のあり方」とこれらの意識とを比較・対象することで適応感というものを捉えること自体の意義を考える。

今回は一般大学生を対象とする適応感把握の試みを行ったが、究極的には、臨床場の中でこれを実践していくことを目指して、方法論の確立を意図したものである。

### 方法と結果

#### 測定尺度についての予備検討

##### 1) 自己像質問紙の作成

上田吉一による精神的に健康な人格特性の概念を中心

に、従来の自己意識研究で用いられている質問紙を参考にして収集した9 カテゴリー 140 対の S — D 項目の中から適応感の測定尺度として適切なものを選択する。

大学1, 2年生 233名を対象に、140項目を用いて「自己のイメージ」を5段階評定させた調査結果にもとづきまず評定値の分布に偏りのある41項目を弁別力の低いものとして除外し、さらに臨床心理学専攻者4名に依頼したチェック・リストの結果より適応感としての意味が曖昧と判断された19項目も省いて、残る80項目について主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。

その結果、自己像の側面として以下の7因子が見出された。

- ① かかわりへの志向性
- ② 人格全体の統合
- ③ 個としての確立
- ④ かかわりにおける自分らしさ
- ⑤ 情緒の成熟
- ⑥ 理性的な態度
- ⑦ 生への活動力

各側面において因子負荷量の高い代表的項目を選び、最終的に総計49項目からなる自己像質問紙を構成した。

##### 2) 生きがい感質問紙の作成

Crumbaugh & Maholick によって1964年に考案されたP I L原版を、その理論的背景となったFranklの文献および佐藤文子らによる日本版P I Lを参照しながら翻訳した。これは7段階評定20項目からなり、人生に目的や意義を見出し充実感を得ているかどうかを測定しようとする一種の態度スケールである。

P L L (翻案)の信頼性検討のため、大学1, 2年生25名にこれを実施したところ、総得点については、折半法で $r = .55$ 、再検査法で $r = .76$ という値が得られたが個人差が激しく、また項目別に見た場合、顕著に安定性の低いものが2項目あった。

次に各項目の妥当性の検討として、大学3年生573名を対象に実施されたP I L調査資料にもとづき、高得点群100と低得点群103名との評定度数分布を比較することで項目分析を行った。その結果、両群間に差がない弁別力の低い3項目が見出された。

信頼性あるいは妥当性に問題があるものを除いた15項目をもって、生きがい感質問紙を構成する。

本報告—適応感を把握する試み—

1) 質問紙法による接近

大学1, 2年生95名を対象に, 上記2種の質問紙を実施し, 各個人について自己像(7側面および全体)と生きがい感の得点を算出した。

これら諸得点間の相互関連を調べたところ, 自己像の第6因子(理性)を除いて他は互いに高い正の相関を示し, 特に①自己像の第2(統合)第4(自分らしさ)第5(情緒の成熟)因子, ②第1(かかわりへの志向)第3(個の確立)第7(活動力)因子と生きがい感の間でそれぞれ結びつきが強かった。前者は自己の静的な側面すなわち主として内的な適応感を, また後者は自己の動的な側面つまり対外的な適応感を表わしていると解釈できよう。

2) 投映法による接近

自己像(全体)と生きがい感の両得点の関係から見ると, 95名のうち,

- ① 肯定的自己像と高い生きがい感をもつ者 (HH群) — 38名
- ② 否定的自己像と低い生きがい感をもつ者 (LL群) — 33名
- ③ 否定的自己像と高い生きがい感をもつ者 (LH群) — 14名
- ④ 肯定的自己像と低い生きがい感をもつ者 (HL群) — 10名

であった。(自己像については尺度の midpoint を境とし, 生きがい感については95名の平均点を境として, 個人得点の高・低を決定した)

各群から3~6名ずつ計16名を抽出し, 個別に面接を行いロールシャッハ・テストを施行した。その結果, 次のような特徴と傾向が示された。

HH群——テストに対する意欲は最も高い。非常に生産的でしかも良質のプロトコルから豊かなパーソナリティを感じる。

LL群——防衛が強いのか, 個性をあまり発揮せず面白味の乏しいプロトコルへの逃げこみがある。

LH群——テストそのものの拒否が多い。実施できた場合, 生産的ではあるが内容的な偏りなどの問題性が感じられる。

HL群——不安, 緊張が高く, LL群よりもさ

らに萎縮したパーソナリティを示す。

さらに7名については, 質問紙法(→意識水準の適応感), 投映法(→深層水準の自己のあり方)両接近からの総合的解釈としてケース・レポートを行った。その結果, 後者は前者の内容を深く掘り下げ裏づけをする役割を果たし, 殊に問題点についてはそれが何に根ざすものか示唆を与えてくれるものとなった。

まとめと考察

本研究の結果より, 個人の適応感を捉えようとするときには, その人の自己意識において①自分なりにまとまりがあり安定していると感じられているかどうか(すなわち人格内部の状態に関する適応感)と②他者や外界へ働きかけ前進していこうとする自分が感じられているかどうか(すなわちまさに行動しつつあるときのその外へ向かう動きに関する適応感)という2側面に焦点を当てる必要があることが指摘される。後者は特に, 従来の自己像研究では十分に捉えられてこなかった側面であり, また捉えにくい面でもあるが, 個人の「生きざま」としての適応状況を把握するためには重要なものであろう。

「内」と「外」という構造をもった適応感という視点から, 今回の調査の対象者となった大学生集団を捉えなおしてみるならば, 彼らは時に未来に夢ふくらませ時に失望したりもする未だ定かならぬ自己を見つめる内なる逡巡と, 外の世界に何かを求めそこへ向かって進まんとするエネルギーの集結とを, 5回にわたる質問紙あるいはロールシャッハのいずれの結果においても示しているのであり, まさしく青年期後期の揺れ動く適応感と言えよう。

最後に, 本研究で用いたテスト・バッテリーを個々の人に適用する場合, 今回は先に述べたように言わゆる正常者を対象としており, 自己洞察の力は大きく, したがっていずれのテストもほぼ一貫した方向性から互いに相補う形でその人を記述するものとなったが, わずかに見られたアンバランスな適応感(LL群, HL群)を示す人々の自己のあり方から推測すると, neuroticな人々は顕著なLH傾向(意欲はありながら低い自己認知に縛られ不適切な行動しかとれない)を, psychoticな人々は顕著なHL傾向(歪んだ高い自己評価を維持しつつ現実的な行動は起こさない)を示すのではないかという仮説がたてられる。今後の臨床実践の場の中で, これについて検討していきたいと考える。